

ところざわ倶楽部

活動報告

野老澤の歴史をたのしむ会

歴史講座 「太平記」にみる小手指原の戦い

記 小林典子

日時 2025年9月11日（木）10:00～12:20

会場 所沢まちづくりセンター（中央公民館）学習室6号

講師 武蔵野学院大学教授 高橋恵美子先生

参加人数 29人



「太平記」は室町時代に成立した軍記物語。

全40巻で、後醍醐天皇の即位から、鎌倉幕府の滅亡、建武の新政とその崩壊後の南北朝分裂、2代将軍足利義詮の死去と細川頼之の管領就任までの1318年から1368年頃までの約50年間の動乱を描いている。

作者は一人の手で短期間に出来上がったものではないだろうと考えられている。

その中で、所沢に住んでいる私達には馴染みの「小手指原の戦い」とはどういうものだったのかというのが今回の講座のテーマである。

会場の個々の机には

- ① 「太平記」にみる小手指原の戦いの梗概
- ② 【テキスト1】「太平記」卷十 小手指原軍の事いぐさ（送り仮名つき古文書）
- ③ 【テキスト2】「太平記」卷三十一 武蔵小手指原軍の事いぐさ（送り仮名つき古文書が用意されていた。）

後醍醐天皇は二度におよぶ鎌倉幕府討幕計画の失敗（1324年と1332年）後、1332年に隠岐島に流されたが各地に軍勢を催促し、翌1333年閏2月隠岐島を脱出して挙兵。

これに対して幕府は3月足利高氏（尊氏への改名は8月）を将軍として討伐軍を派

遣。直後の4月には高氏が天皇方に寝返る。

これより「太平記」卷十 義貞反逆の事

- ・新田義貞は1333年3月11日「先朝より綸旨」を賜り（巻七における護良親王発給文書）、仮病をつかい本国に戻り兵を募る。
- ・高氏の翻意（上記の天皇方への寝返り）を知った北条高時による追討軍派遣のため、「路地の兵糧」として臨時の天役を徴収→新田庄世良田郷において使節の行き過ぎた譴責行為に対し、義貞は使節を捕らえ殺害。
- ・北条高時、義貞兄弟の追討を命じる。
- ・義貞、一族内にて評定
- ・5月8日午前6時頃、百五十騎にて上野国生品神社で挙兵。
- ・同日晚方、利根川方面から援軍二千騎合流。のち、新たに五千騎合流。
- ・5月9日、武藏国に入る。
- ・同日、家臣に伴われた足利高氏子息（後の二代将軍義詮）の二百余騎合流。
- ・諸国の援軍合流により、二十万騎の大軍に。

【テキスト1】「太平記」卷十 小手指原軍の事

- ・路次に一両日逗留。
- ・5月11日午前8時頃、幕府軍は小手指原にて新田軍を視認したが、想像以上の大軍に進軍を止める。新田軍入間川渡渉。開戦。
- ・新田百騎 vs 北条二百騎、北条千騎 vs 新田二千騎→戦力拮抗、衝突は一日に三十度に及び、新田三百騎、北条五百余騎を失う。
- ・暮れ方に終戦、新田は入間川に陣、北条は久米川に陣。



【テキスト1】「太平記」卷十 久米川合戦の事

- ・5月12日夜明けとともに新田軍、北条軍の久米川陣へ寄せる。
- ・北条軍、動かず新田軍を迎撃つ。
- ・新田軍の犠牲者はわずか、北条軍の兵は多く失われ、分倍河原までひきのく。
- ・新田軍、深追いせず久米川に陣をとる。

【テキスト1】「太平記」卷十 分倍軍の事

- ・久米川合戦の敗戦の報により、北条泰家、鎌倉を出立。

- ・5月15日夜半に分倍河原に到着。
- ・新田軍、北条軍の援軍の到着を知らず、夜明け前に分倍へ寄せる。
- ・新田軍、北条軍に囲まれ奮戦するも、ついに押し負けて堀金（狭山市堀兼）を指して退く。
- ・幕府軍、追撃すれば義貞を討ち取れたはずが、「誰かが討ち取ってくれるだろう」と見逃す。→「平家の運命の尽くる処のしるし」

[その後]

- ・義貞のもとに援軍六千余騎到着。都合十万余騎。
- ・5月16日午前4時頃、分倍の幕府軍へ奇襲攻撃。
- ・幕府軍混乱。関戸にて部下の奮闘により、北条泰家は鎌倉帰還。
- ・義貞軍、関戸に一日逗留。関東の援軍増加。八十万騎。

→鎌倉幕府攻撃と滅亡へ。

この後の歴史についてはよく知られているように、

1333年7月、後醍醐天皇による建武の新政開始

8月、高氏は天皇の名の一字を贈られて尊氏と改名するも

翌1334年11月には両者の関係が悪化し、

1335年11月、天皇は新田義貞を大将として尊氏討伐軍を派遣。

尊氏これに敗れるが12月には勝利。というような争いが続き、

1336年10月、天皇と尊氏和睦成る！も東の間、

12月後醍醐天皇、吉野に脱出して南北朝は分裂へ。

一方、1338年閏7月越前で戦っていた義貞が戦死。

そして8月、尊氏が念願の征夷大将軍となる。

また1339年8月、後醍醐天皇が吉野にて崩御。

～この間、関東において南北朝軍の対立が激化する（詳細は省略）～

十余年後

【テキスト2】「太平記」卷三十一 武藏小手指原軍の事

それまで協力し合ってきたように見えた尊氏と弟の直義が不仲となり、

1352年1月和解が成ったものの、翌2月直義が死去。

そして閏2月に新田義貞の遺児義興・義宗が上野で挙兵。

再び小手指原で対峙する。

この戦いは江戸時代には「武藏野合戦」と呼ばれていた。

ただし、「太平記」と史実とでは対戦した日も場所も違うそうである。

戦いは尊氏の勝利とある。

小手指一帯は原野を成しており、関東の南北を結ぶ鎌倉街道の要衝だったため、戦場となることが多かったという。

高橋先生のよく通る声で読み上げる古文は、いつまでも聞いていたい心地よさである。皆様もぜひ拝聴なさることをお勧めする。

以上